View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

クリストバル・デ・モリーナの タキ・オンコイに関する証言

谷　口　智　子

はじめに

16世紀のクロニスタ（年代記作者）であるクリストバル・デ・モリーナ神父は、『インカの神話と儀礼の報告書』(Relación de las fábulas y ritos de los Incas)[1)]の最終章で、1564年から1565年頃のタキ・オンコイ運動について記録した。これは、当時クスコ司教管区パリナコチャス地方のドクトリーナ（布教村）で司祭をしていた「タキ・オンコイ運動の第一発見者」ルイス・デ・オルベラ（オリベラとも表記）神父が記した報告書を基に、モリーナが執筆したものとされる。一方で、「タキ・オンコイ運動の第一発見者としての功績」を旗印に、クスコ司教区内での昇進を画策した巡察使クリストバル・デ・アルボルノスが、その生涯で4回作成した『功績報告書』(Información de servicios) のうち2度に渡り、モリーナは証人として出廷し、その供述内容は公証人の手により記録された。初回はオルベラによる「タキ・オンコイ運動の発見」から約10年後の1577年、2回目はモリーナの死の前年である1584年であった。つまり、クリストバル・デ・モリーナはおよそ20年の間に、少なくとも3回、タキ・オンコイ運動にインフォーマントとして関わり、自著もしくは裁判記録という形式で史料を残したといえる。

とはいえ、現在我々が自由に手に取ることができる、タキ・オンコイ研究の両輪を担うこれらの一次史料は、16世紀以降数百年に渡り所在不明であった。その波乱曲折な史料発見と冊子化の過程の一片を紐解く行為は、タキ・オンコイ研究史を知る上で欠かせない。『インカの神話と儀礼』最新版（2011年刊行）によれば、この報告書の初版は、1873年にクレメンツ・R・マーカムが、マド

リードから送られた転写資料を基に翻訳した英語版であった。出版後、同書への興味関心が高まるなか数人の研究者が更なる写しを作成し、現在は北南米の複数の図書館が所蔵する。初版から半世紀後に刊行されたスペイン語版は、チリの写本を用い、その後もリマやマドリードのものを底本に幾度となく刊行されている[2)]。さらに時を重ねてセビーリャのインディアス古文書館 (El Archivo General de las Indias) にて1967年、ペルーの歴史・民族学者ルイス・ミリョーネスが探し当てた資料316こそ、スペインへ送られたとされながら歴史の狭間に埋もれていた『功績報告書』の束であった。この研究成果は、数百部の初版を経て、1990年出版の『ワカの復活――16世紀タキ・オンコイ関係研究及び資料』(*El Retorno de las huacas, estudios y documentos sobre el Taki Onqoy, siglo XVI*) に第 2 版が所収された[3)] (その後、改訂版である第 3 版が2007年に刊行された)[4)]。タキ・オンコイ研究が、この第 2 版の発売を受けて爆発的に勢いを増した事実は、四半世紀を経た現在から遡って俯瞰すれば、先行研究の発表年次の偏りからも、あながち的外れとも言えないだろう。

本論では、『インカの神話と儀礼』のうち、タキ・オンコイの章について抄録し、続いて、『功績報告書（1577年、1584年）』の質問事項 (Interrogatorio) 及びモリーナによる証言を全文掲載する試みから、クリストバル・デ・モリーナという一人のクロニスタが20年というスパンで目にし、書き残したタキ・オンコイ現象を縦断的に追ってみたい。なお、『功績報告書（1570年）』及び先行研究については、拙稿「クリストバル・デ・アルボルノスの『功績報告書』（1570年）から見るタキ・オンコイ運動」を参照されたい[5)]。

インカの神話と儀礼　タキ・オンコイの章〔1564年～1565年頃〕[6)]

約10年前、この王国のインディオたちのなかに、過ち[7)]が広まり始めた。彼らはタキ・オンゴと呼ばれる歌い方をしていた。クスコ司教管区パリナコチャ地方の司祭であるルイス・デ・オリベラ神父は、この過ちや背教を目撃した最初の人物であったために、当時このレパルティミエントの司祭を務め、インディオたちがどのように行ったか、その理由をここに記した。

クスコ司教管区パリナコチャ地方にて、この地方の司教総代理ルイス・デ・オリベラが申すには、同地方だけでなく、他の地方全域や諸都市、チュキカカ、ラ・パス、クスコ、ワマンガ、リマやアレキパでさえも、大半の者が最大級の背教に陥った。授けられたキリスト教信仰から離れ、異教徒の時代に用いた偶像崇拝に回帰した。インカが蜂起したビルカバンバの、インカに味方する呪術師が最初に考え出したのではないか[8)]。誰が始めたのかを確かめようもないが、同じ事がこの王国であったためである……[9)]。

〔15〕70年以前ではなく、インディオたちは、スペインからこの王国に、とある病を治すための薬に用いるインディオたちの脂肪を求めて人を向かわせていると信じていた[10)]。その頃、インディオたちはひどく隠し立てするようになり、スペイン人から距離を置き、薪や薬草、その他の物をスペイン人の家に持って行きたがらないほどだった。体から脂を抜き取られるために、家の中で殺されたくないと言った。この全ては、あの強盗の巣窟から発せられ、インディオとスペイン人の間に敵意が生まれた。この地のインディオたちは、インカ由来のものを大変敬ったために、あの地から生じたのだ。副王ドン・フランシスコ・デ・トレド殿が彼らを制圧し追放するまでは、それは急激に様々な……。我らの主たる神は大いに奉仕された。

この哀れな者たちを惑わすために悪魔がもつ奇抜さに立ち返ると、彼らはキリスト教徒が破壊し燃やしたこの王国すべてのワカが蘇り、二手に分かれると信じていた。一方はパチャカマのワカのもとに、もう一方はチチカカのワカのもとに集まり、そのすべてのワカは空中をさまよい、ディオスに戦いを挑み打ち破るよう命じて、既に打ち破ろうとしている。〔ピサロ〕侯爵がこの地に攻め入り、ディオスがワカに、スペイン人がインディオに勝利した。しかしいま、世界はひっくり返り、ディオスやスペイン人が今度は敗北し、スペイン人は皆死に、スペイン人の諸都市は水であふれ、海面は増し、彼らは溺れ死ぬのだから、スペイン人についての記憶はなにも残らないだろう。この背教では、我らの主たる神が、スペイン人やカスティーリャ、カスティーリャ産の動物や食物を創り出したと信じていた。ワカは、インディオやこの大地、かつてはインディオたちのものだった食物を創り出したと思っていた。このようにしてイ

ンディオたちは我らの主から全能の力を奪ったのである[11)]。

多くの説教師がインディオの近くにやって来て、高地や集落で教えを広めた。彼らはワカの復活を説いて回った。いまやワカは空中をさまよい、干からびて乾き、死にそうだった[12)]。なぜなら、もはやインディオたちがワカに供物を捧げたり、チチャを注いだりしないからだ。スペイン人やカスティーリャ産の家畜の心臓に、馬に、キリスト教信仰を保つインディオの心臓にも植え付けるために、多くの畑に虫をばらまいた[13)]。ワカは洗礼を受けたすべてのインディオたちに腹を立てていた。もしキリスト教を棄教し、ワカの元に戻らなければ、ワカは皆殺しにするだろう。ワカの恩寵を求める者は、繁栄し、恵まれ、健やかに過ごすだろう。ワカを戻すために、数日間断食し、塩やトウガラシを食べず、性的関係を持たず、色の付いたトウモロコシを食べず、カスティーリャの作物を食べず、料理に用いず、着衣せず、教会に立ち入らず、祈らず、司祭の呼びかけにも応じず、洗礼名で呼ばれないようにせねばならない。このやり方でワカの愛に戻り、殺されることはないだろう。同様に、インカの時代に返り、ワカは話すために、石、雲、泉ではなく、いまやインディオたちの体内に入り込み、彼らを通じて話すのだった。そしてワカが家で過ごしたがったら、彼らの家を掃除し支度しなければならなかった。さらに体を震わせ、地面を転げまわる多くのインディオたちがいた。取り憑かれたかのように、しかめ面で石を投げる者もいた[14)]。様子が落ち着くと、人々は恐れをなして近づき、その身に起きたことを尋ねると、彼は、あるワカが体内に入り込んだのだと答えた。人々は彼をかつぎ、選ばれた場所に運び、藁と布で小屋を造り、彼を赤く塗った[15)]。リャマ肉や深紫色のトウモロコシ、チチャ、リプタ[16)]、貝、その他の物を捧げ崇めるために、彼を小屋に入れた。村の者総出で、2 ～ 3 日祭りを行い、踊り、酒を飲み、ワカが取り憑かれた者の体内に宿り話すことを呼び求め、夜通し起きたままだった。

時々、そのような者たちは村へ行き、インディオたちに、神に奉仕せぬよう、神の時代でなくワカの時代であり、キリスト教をすっかり棄教したかと脅迫めいた説教をした。インディオの名前でなくキリスト教の洗礼名で呼ばれるカシケやインディオと言い争い、スペインやルサーテ[17)]産のシャツや帽子、麻

靴、その他の衣服を身に着けないよう説いた。その取り憑かれた者たちは、村々で、燃やしたワカの残りやワカから持ち出した石のかけらがないかを尋ねていた。村人の前でその者たちは頭を布で覆い、石の頂きにチチャを注ぎ、白いトウモロコシの粉で洗い清めた。彼らはワカに庇護を求めて叫んでから、石を手に持ち立ち上がり、村人に語った。「ここに我らを庇護するものを見るだろう。ここに我らを作り、健康、子どもたち、畑を与えるものを見るだろう。これを、インカの時代にあった元の場所に戻しなさい。」そして多くの供物を行うのだった。あの頃の呪術師たちは村から離れ罰せられ……。彼らの立場を利用して気ままに村人たちの元へと帰り、ワカになったインディオたちの側を離れようとせず、リャマ肉やクイを供物として受け取った。

この悪事はあまりに広く信じられ、祝われたために、レパルティミエントのインディオのみならず、スペイン人に混じり諸都市に暮らすインディオまでもが、この哀れなことを信じ、断食し、堕落した。この頃、信仰をもち死んだために堕落した者は少なくなかった。ついには、司教総代理ルイス・デ・オリベラが、パリナコチャやアリカ地方[18]で刑罰を科し始め、リマの王立アウディエンシアや大司教、およびチャルカス司教、他の地域、クスコ司教区のアドミニストラドールであるペドロ・デ・トロ神父に知らせたために下火になったものの、7年以上続いたことになる。

インディオたちが神とスペイン人は打ち負かされつつあると信じたために、この背教は企てられた。大地とともに蜂起しようと企てたことは、75年には広く知れ渡っていた[19]。カストロ学士がこの王国の総督となり、クスコ、ワマンガ、ワヌコ……、これらの諸都市で武力蜂起の動きがあるとコレヒドールたちから知らされたためである[20]。この時期、それぞれの地方に異なった背教のやり方が存在していた。体内にワカを取り込んだことをほのめかしながら踊っている者。ワカが体内に入り込んだと言って震えている者。干からびた石に向かい、家に閉じこもり、叫び声をあげている者。興奮しながらお互いを切り合い殺し合う者。ワカにその身を捧げるために、川に飛び込む者。我らの主がその慈悲によって、哀れな者たちに光を灯し奉仕されるまで続いた。ワカを信じ続ける者たちは、キリスト教徒によって死んだインカとビルカバンバを知り、

説教され信じたこのいかさまを知ることとなり、彼らに起きたことでなく、真逆のことを信じるようになった。

功績報告書〔1577年〕[21)]

証人　クスコ市、1577年1月14日。前述の参事会員クリストバル・デ・アルボルノスは、司祭クリストバル・デ・モリーナを証人として召喚した。法に則り宣誓し、質問事項を尋ねられ、次のことを述べた。

1）はじめに、私こと前述の参事会員クリストバル・デ・アルボルノスを、この地にて、いつ頃から知っているか。8年ほどクスコ司教座聖堂参事会員であり、陛下から前述の参事会員の地位を示され、教会法により正式に認められた事を知っているか。

――「クリストバル・デ・アルボルノスをこの地で10年以上知り、彼は約7年にわたりクスコ司教座聖堂参事会員であり、質問のとおり参事会員の地位にある。」

〔欄外に〕人定（じんてい）質問　年齢は48歳位で一般的事項について抵触しないと述べた。

2）同じく、参事会員となって以来、もしくはそれ以前から、私が家、召使、奴隷、ラバ、家族を持ち裕福であり、大変な権威を備える者として人々によく知られ、それは両親や祖先から受け継ぐ品位やイダルゴの身分によるものか。

――「彼を知る間つねに、参事会員である前から今に至るまで、前述のクリストバル・デ・アルボルノスが、裕福な人柄や家柄の人物として扱われるのを見た。高潔な人物として、奴隷、ラバ、召使を持ち、大変権威ある立派な家柄と人物であり続けるのは、高貴な生まれのイダルゴだからである。」

3）同じく、私がクスコ司教区に来て12年ほどになるだろうか、いとも尊き空位のクスコ司教座聖堂参事会は私の能力を買い、同司教区の総巡察使として任命し、私はアレキパ市やワマンガ市をはじめ司教区内のインディオが居住する諸管区を網羅し、多くの権限をもち巡察した。その巡察で、この司教区のインディオたちの偶像である大量のワカを私は見つけ、前述の偶像についての司

祭、偶像崇拝の司祭、関わりを持ったカシケたちを対象に、その儀式を正し、改め、棄教させ、我らの主たる神の知識を授けようとした。特にタキ・オンゴと呼ばれる新しい背教において、この時期王国中に広まったものであり、それによりこの司教区の多くが穢されていた。前述の背教や、背教を信じる先住民たちの霊魂に生じた害悪、その背教を撲滅し、刑罰を科し、私が自らインディオたちの言語を用いて説教するなかで、我らの主たる神に為した奉仕について、証人たちが知る事を述べよ。

――「9年ほど前であったか、思い出そうとすると、空位のクスコ司教座聖堂が、アレキパやワマンガ地域にある諸管区の総巡察使として、まだ参事会員になる以前のクリストバル・デ・アルボルノスを任命したのは、巡察を遂行するに十分な能力をもつ人物であったためである。その巡察において、必要な権限を備えて赴いたアレキパ地域で、我らの主たる神が大いに奉仕されたと人々が公言するのを私は聞いた。なぜなら、ワマンガ地域にて行った巡察において、大量のワカを見つけ、これらを焼くよう指示し、ワカの司祭や呪術師たちを罰するよう命じたからである。ソラス、アウカラ、ルカナスの諸管区ではタキ・オンゴの説教師たちを大勢探し当てた。これは我々の時代にインディオたちが行った最も悪い迷信であり、これらに関し彼らの多くを罰し、首謀者である説教師たちは、2人の男と1人の女であったが、クスコ市へ捕らえて送った。インディオたちをそそのかした者たちは、ワカはディオスに打ち勝ったものとし、十字架を崇めず、教会にも立ち入らないよう命じた。彼らに食物を与えるのはディオスではない。囲いに入れられ空中をさまようものでないのなら[22]、またこれを信じなければ、グワナコやビクーニャ、あるいは別の動物にインディオたちを変えてしまうだろうというものであった。空位の司教座聖堂首席司祭及び参事会員は、前述のインディオの説教師を罰するよう命じ、多くの霊魂が住む村の真実を明らかにし、多くの者を目覚めさせた。その者たちが言うには、何も知らず、貧しさのため、施される供物により食糧を得るために、あの事柄をインディオたちに説いていた。このことから、その者たちがインディオに生じさせた迷いを覚まし、説いて回った村々へと伝わったために、我らの主への大いなる奉仕となった。私が知っているのは、悔悛の日にインディオた

ちに説教していたためである。また私がワマンガへ赴いた折、当時アウカラの諸管区にて司祭を務めたゲレロという名の神父がいた。前述の参事会員アルボルノスが巡察使としてその巡察に赴いた際、同市の巡察で我らの主に行った偉大な奉仕について彼に語って聞かせたためである。そのようにして前述のインディオたちは、公然と日常的に行っていたタキ・オンゴという過ちを止めた。なぜなら、私は同市のインディオたちへの説教を受け持つなかで、信者たちに悪行も、その時までは行われていた事も見出さなかったためである。」

４）同じく、ペルー王国の副王フランシスコ・デ・トレド閣下は、欠員のあるクスコ司教区に着任してほどなく総巡察に専念され[23]、私の功績と適性、またその他の事について認め、司教区及び王国の最たる要所の内、チンチャイスーヨ地方について、陛下の名のもと、総巡察使として私を任命したか。私は巡察に赴き、レドゥクシオンに携わる一方で、ワカや偶像を破壊し、我らの主たる神への奉仕における先住民たちへの教理教育や、教会や閣下からの勅令に含まれる他の事柄についても万事取り計らった。ここでの評判により、神が大いに奉仕されたということについて述べられていないか。

――「この王国の副王閣下は、前述の参事会員アルボルノスが質問にあるような人物であるため、チンチャイスーヨ地方のパリナコチャス、大アンダワイラス[24]地域の総巡察使に任命した。〔クスコ司教座聖堂に〕空位のある頃、教会に関する総巡察の際に、質問内容について経験のある者として、我らの主たる神に奉仕した。」

〔欄外に〕クスコ、アルカルデの面前で、77年。

５）同じく、クスコ司教座聖堂司教ドン・セバスティアン・デ・ラルタウン猊下がスペインから赴任されたのち、私及び上述の内容を評価し、私がこの司教区の総巡察使に就いてから、現在そうであるように、またこの地で２年そうであったように、司教総代理として任命し、私はこの司教区を管理したか。目下そうであるように、前述の司教殿の留守に代わって管理し、配慮、気づかい、廉直、精励、慈悲そのすべてを持って、我らの主や陛下は奉仕されたか。

――「クスコ司教猊下は、前述の参事会員アルボルノスを同司教区の司教総代

理として任命し、現在も精励にその任務に就いている。司教裁治権[25]をもち、前述の司教殿の留守に際し同司教区を管理し、その事で質問内容のように陛下に大変奉仕した。」

6）同じく、私は司教総代理の在位期間に、委員長猊下より委嘱され、この司教区のサンタ・クルサダ委員に就き、教皇大勅書[26]の発布において、委員の任務全般において必要な権限のもと精励に事にあたったか。

――「この目で見たために質問内容について知っている。」

7）同じく、前述のとおり、私の能力について理解いただいたとおり、教皇聖下や国王陛下は、私に最高の顕職を授ける事で奉仕されて然るべきで、その全てにおいて私は奉仕できる。任される全てについての賞賛される報告と、私の功績を理由に、下賜されるいかなる恵与（メルセ）[27]であっても適任であり栄誉に値する者であるか。

――「前述の質問内容のとおり、前述の参事会員アルボルノスが質問にあるような者のため、教皇聖下や国王陛下が下賜されるいかなるメルセであってもふさわしい。我らの主たる神に大いに奉仕するためで、いかなる顕職が任されてもふさわしく、今までそうであったように託された事柄について優れた報告を行うだろう。」

8）同じく、前述の事全ては世間の評判か。クリストバル・デ・アルボルノス。

――「前述の事は世間の評判であり、宣誓により事実である。」署名。クリストバル・デ・モリーナ。

功績報告書（1584年）[28]

証人　クスコ市、前述の年、3月28日。学士ブラボ・デ・ベルドゥスコは前述の司教総代理殿〔アルボルノス〕の代理人として、司祭であり、同市の先住民たちの言語を用いる説教師で、かつて同司教区の総巡察使であった、いとも尊きクリストバル・デ・モリーナ殿を証人として召喚した。司祭のお言葉での宣誓により事実を話すと誓い、質問され次のことを述べた。

1）はじめに、クスコ司教座聖堂参事会員及び司教総代理である前述のクリス

トバル・デ・アルボルノスを、この地にて、いつ頃から知っているか。
――「クスコ司教座聖堂参事会員及び同司教区の司教総代理である前述の参事会員クリストバル・デ・アルボルノスを、この地にて16年ほど知っている。」人定質問。年齢は54歳より上で、法の一般的事項について抵触しないと述べた。
２）前述の参事会員クリストバル・デ・アルボルノスが高潔な人物で、この王国においてそのように知られ、高い品性を備える者として常に扱われ、イダルゴとして常にみなされたのは、この地に居住するあいだ絶えずそう評価されたためか。
――「前述のとおり、前述の参事会員クリストバル・デ・アルボルノスを、この地にて16年ほど知り、その間つねに、有名なイダルゴとして扱われ、いつも多くの奴隷や馬、召使を持ち、この町に来たときも同様であった。質問にあるような人物であるため、彼を知る地域の人々だけでなくそれ以外の者も質問のとおりに扱い、その逆のことを見聞きしていない。」
３）同じく、前述の参事会員クリストバル・デ・アルボルノスは教会法を修めた[29]賢明な人物で、クスコ司教セバスティアン・デ・ラルタウン殿が、クスコ司教座聖堂参事会全体と対立した折、前述の参事会員〔アルボルノス〕を司教総代理として選出したのは、その賢明さと優れた術策を尊んだためか。そして前述の司教猊下の死により、空位の司教座聖堂は、前述の者がトレント公会議に定めるように修了した事に敬意を表し、司教総代理として選出したか。現在、前述の参事会員はその職務に就いているか。
――「前述の参事会員クリストバル・デ・アルボルノスが、教会法を修め知識をもつ司教総代理であるのを、修了証を見たため知っている。彼が博学であるため、亡くなった司教ドン・セバスティアン・デ・ラルタウン殿[30]は、クスコ司教座聖堂の聖職禄受領者たちと険悪となり出向いた際に、前述の参事会員を任命し、同司教区の司教総代理とした。前述の事や、参事会員クリストバル・デ・アルボルノスのようにその任務を委ねる人材が司教区にいなかったためである。その仕事ぶりが人々から称賛され公正であったために、前述の司教殿の死後、空位〔の司教座聖堂〕は同様に司教総代理に任命し、今もその任務に就

いている。」

4）同じく、この王国の副王であったドン・フランシスコ・デ・トレド猊下は、陛下の勅令によりこの王国にて行われた総巡察のために最も適任である者たちを登用し、権威、知識、経験といった素養は、彼〔アルボルノス〕に備わったものでもあったか。その者たちの中から前述の参事会員〔アルボルノス〕を、この司教区で最も多くの住民がいて豊かであるチンチャイスーヨの諸地方を巡察すべく抜擢したか。住民たちを説き、教義を与え、かなりの公正さをもって巡察にあたった事は、先住民の改宗に最も重要な事柄であったか。

――「当時、私はクスコ市に滞在し、同市の教区や山間部を巡察していた。前述の参事会員クリストバル・デ・アルボルノスが質問にあるような人物であるため、この王国の副王であったドン・フランシスコ・デ・トレド猊下は、彼を総巡察使に任命し、チンチャイスーヨの諸地方へ派遣した。そこでは前述の参事会員が、レドゥクシオンや質問にある他の事柄において、我らの主たる神へ大いに奉仕した。とりわけ、その地方での別の巡察にて隠れ残っていた偶像を破壊する事への専心では他の多くの巡察使から抜きん出ていた。先住民たちの改宗に尽力し命令を下したのは、周知のことである。」[31)]

5）同じく、前述の副王は恰好の時期に参事会員で良識ある者として他の多くの事柄を託し、その一例とは、陛下が水銀を保有するワンカベリカの基礎を築くことであったか。各年30万ドゥカード以上の王室財産に興味を惹かれ、オロペサ村を建設させ、その村に赴き、他の諸管区の多くでそうしたように、最初の教会と布教村といった基礎を築いたか[32)]。また総巡察において自費で奉仕し、前述の事のために何ら受け取らず無報酬で、前述の参事会員〔アルボルノス〕が奉仕した事について、その他多くの事柄がこの場で説明され得るか。

――「質問内容について私が昔から居住するクスコ市では周知の事実である。彼が行った多くの奉仕やかつての任務によって、前述の参事会員ほどには多くの功績をもたない他の巡察使たちが手にしたように、陛下や副王たちから報酬を得たかどうか知らない。」

6）同じく、何年も前に、前述の副王ドン・フランシスコ・デ・トレドは、上記の内容やその他多くの事柄において陛下に奉仕するためにその人物〔アルボ

ルノス〕を従事させ、それはこの王国の要所であるクスコ司教管区の総巡察使としてであったか。諸管区にてどのように先住民が神を崇め奉仕すべきか、はじめてそのやり方を示したか。前述の巡察について多くの名誉を得、良き判事とみなされ、その事により我らの主たる神の面前やドン・フェリペ国王陛下の面前で褒め称えられるべきか。出廷する証人はどう思うか。

――「前述のドン・フランシスコ・デ・トレド様がペルーに着任する数年前、かつて空位〔の司教座聖堂〕は前述の参事会員クリストバル・デ・アルボルノスを総巡察使に任命し、彼はその巡察を精励に行うなかで我らの主たる神や陛下に大変奉仕した。ルカナスやチンチャイスーヨ地方のインディオたちが保持していた大量の偶像やワカを破壊し、砕き、燃やしたからである。当時、巡察で移動していたその地域では、インディオの説教師たちも歩きまわり、土着のインディオたちに対して福音の法に抗う説教を行っていた。その多くを罰し、なかでも最も罪深い2人の土着のインディオたちのうち、ドン・ホアン・チョクネ[33]と呼ばれる者を、この司教区またはこの王国の要であるクスコ市へと移送し、他の者たちへの見せしめとして罰した。そして、インディオたちの迷いを覚ますために、その地方から偶像崇拝者全員を遠ざけた。この者たちはインディオたちに対し、偶像やワカはすでにディオスに勝利し、司祭たちを信じず、十字架上のディオスを崇めないよう命じた。なぜなら、ドン・ホアン・チョクナ〔チョクネ〕は、彼らが見たこともないあるものを携帯し、そのものがこれらの事を彼に命じ、さらにこれにより人々は食べ物が与えられると伝えていたためである[34]。この者たちは同市で罰せられ、その執行日に、このために多くの地域から集まった土着のインディオたちに対して説教し、その過ちを論破したために、彼らは福音の法に抗い命じられた事柄を全て捨て去ったのだった。多くの涙を流して彼らは改宗し、人々に対して許しを乞い、貧しさのために、食べ物を得るため、あの生き方を選んだと人前で語った。私は、インカの言語による先住民の説教師を長年務めているために、我らの主たる神への大いなる奉仕によって、大変おおきな成果が為されたとわかった。そのようにして、タキオンゴと呼ばれる発生した新しいセクトが収まり始めたためである。その全ては、前述の参事会員クリストバル・デ・アルボルノスが偶像を破

壊し、ここに説教師たちを送致する際に講じた慈悲あるやり方と働きによるもので、彼が巡察した諸地方では、盲目から目覚めたために、先住民たちの間に素晴らしいキリスト教信仰が残された。司祭たちに対しては、今後どのように巡察し、先住民たちに再び築かせないために崇められた場所の巡察に注意を払うよう命じた。そして、ワカの説教師や呪術師たちが教育を受け、これ以上の害悪を与えず、盲目の状態へ戻らぬため、司祭たちに引き渡して任せた。周知のこと以上に私が知っているのは、私が巡察使をしていたコンデスーヨの諸地域においても見つけ出し、前述のような命令が下された。その巡察において、前述のクリストバル・デ・アルボルノスが、寛大な良き判事として判決を下すために現れたのを、私はこの目で見たためである。」

7）同じく、前述の参事会員クリストバル・デ・アルボルノスは、多くのワカや偶像をこの地で暴いた人物か。先住民たちがまことの神として保持し崇めていたもので、ワマンガ、アレキパ両市の諸管区、チンチャイスーヨ、ソラス、ルカナス、パプレス、チルケス地方[35]においてそのようであり、出廷する証人たちが明らかにする他の多くの管区でのことか。

――「質問のとおり、前述の参事会員クリストバル・デ・アルボルノスがこの地で最も多くのワカを発見した者であるというのは事実である。どの巡察使も、前述の参事会員〔アルボルノス〕ほど注意を払わず、彼が行った成果を挙げず、矯正をしなかった。それは彼がもつ大変な熱意とキリスト教信仰や、我らの主たる神へ奉仕し、陛下のもつ王の良心へ応えることから生じた。」

8）同じく、前述の参事会員クリストバル・デ・アルボルノスは精励に、タキ・オンゴと呼ばれるセクトや背教を明るみに出した最初の人物であったか。その背教において洗礼を受けたのち、インディオたちは、踊ったり、震えたり、輪になって歩いたりし、その踊りで悪魔、自らのワカや偶像に祈願していたか。その踊りで、イエス・キリストの真なる信仰に抗い、かつてこの王国に過ごしたキリスト教徒や聖職者から授かった教えに背いたか。そのセクトは既にはびこり、この王国の大部分に広まっていたか。前述の参事会員〔アルボルノス〕は慈悲深く、大変優れた通訳で、先住民たちの言語による説教師であるゆえに、多くの者に説き、この誤りや他の多くの事柄に気づかせたか。これに

ついては、この質問に関して提示する報告書[36]や証人たちにより、さらに多くの事が明らかになるだろう[37]。

――「前述の参事会員クリストバル・デ・アルボルノスは、質問にある前述のタキ・オンゴのセクトや背教を最初に発見した者の一人であった[38]。それは、この地が征服されてから存在した最も有害なものであった。なぜなら、この地に住む最も中心的なインディオたちが入信し、害を与えつつ全土に蔓延し、質問が述べるやり方であったためである。前述の参事会員が巡察で赴いた諸地域でみせた慈悲の力によって、それについての説教や刑罰によって、この哀れなことの大部分が終息し始め、我らの主は大いに奉仕された。前述の参事会員はあの時期に巡察した者のうち、巡察使としての権威によって、慈悲やそれについて行った説教によって、最も上手く取り組んだ一人であった。それを知ったのは、私がインディオたちの言語の通訳であり説教師であるためで、その者たちから前述のとおりであると知った。」

９）同じく、前述の事を知り、ここに来た司教ドン・セバスティアン・デ・ラルタウンは、前述の参事会員〔アルボルノス〕が先住民たちにおける当件について多くの事を知り、その人物こそが職務に関する事柄を取り締まりうることから、クスコ司教区全土の総巡察使として任命したか。その任務において多くの管区を巡察する中で、我らのキリスト教信仰は増し、この先住民たちのもつワカや偶像に係わる多くの呪術師や聖職者に、罰を科し裁いたか。

――「質問のとおり、周知のこと以上に、前述の参事会員が巡察でなした多くの良き事柄を私は目にした。先住民たちの魂全体にカトリック信仰を植えつける熱意を彼は持ち続け、先住民たちの偶像崇拝を撲滅するために、私に何度か一緒に巡察を行いたいと申し入れてきた。私が通訳として彼に仕え、偶像崇拝の物事を残さず一網打尽にし、撲滅するという提案で[39]、キリスト教信仰の熱意と我らの主たる神への奉仕を願っていた。また、今では空位〔の司教座聖堂〕により司教総代理であり、私が先住民の言語で毎日曜と聖日に行う説教にて、なんらかの処罰が科されるとき、普通は3000名を超える霊魂が集い、前述の参事会員クリストバル・デ・アルボルノスは、我らの主たる神への奉仕の熱意をもち列席して、前述の先住民たちに大変役に立つ説教を行った。」

10）同じく、前述の司教猊下がロス・レイエス市で開かれた教会会議に出向き、彼〔アルボルノス〕に司教区の統治を任せた際、前述の参事会員〔アルボルノス〕は敵対者によって管区会議で告発され、その中で自ら証言し、赴いた全ての巡察や不当に課された職務において無報酬で得たものであるとした。そして、ロス・レイエス大司教猊下及び前述の会議長を務める諸氏の、公正なキリスト教徒である良き判事によって判決が下された。この質問とともに提示した判決文によって示す内容であるか[40]。

――「質問のとおり事実である。教会会議が行われたとき、私はロス・レイエス市にいたためで、この王国の先住民たちに向け、彼らの言語で作られるべき公教要理や典礼暦の翻訳のために同市へ行き、前述の参事会員殿が告発された事を知った。そして、病気のためロス・レイエス市を離れ帰路についた際、教会会議に向かう前述の参事会員殿に出くわした。その後、虚偽の事実で訴えられた事により彼に自由が与えられ戻ってきたのを見た。周知の事実であり、その事について教会会議では十分な判決が下されたために知っている。なぜなら、訴えられた事由は彼にふさわしくないためである。」[41]

11）同じく、前述の参事会員〔アルボルノス〕は50歳を越え壮年に達した者であり、この司教区に住む多くの者から大変愛されている。かなりの分別を備えた人物とみなされ、いまやこのペルー王国にて要職者として知られるどの聖職者もが備える良識と権威を持った人物である。この王国や王国以外でも、そのたゆまぬ寛大さでもって、陛下がこれらの奉仕について褒め称えることをお望みならば、前述の参事会員クリストバル・デ・アルボルノスを司教区か主要都市において昇進させる事は、大変適任で、資質を欠くこともなく、陛下が彼に下賜するいかなる恵与（メルセ）であっても必ずや満足するだろう。そしてこの教会の参事会員として15年になり、資質を備えた人物であると証明し得るに十分な期間であったが、公開、また非公開を問わず、その人物〔アルボルノス〕について評価を与える事は決してなかった。陛下が彼に与え、彼の奉仕とその人間性によってメルセを与える事は、王の寛大さを目にし、彼に為されるいかなるメルセであっても大変ふさわしいだろう。

――「前述の参事会員クリストバル・デ・アルボルノスは55歳を過ぎ、外見

も年相応で、どんな部類の人よりもこの司教区では尊ばれ、身分の上下を問わず皆から愛される。この王国にて要職者として知られるあらゆる聖職者のように、大変落ち着いて、かなりの良識や権威をもち、公正で偉大な模範的人物であり、徳が高く、キリスト教徒で高潔である。前述の事や、この王国で為した諸任務からも評価に値し、陛下は奉仕された。王のたゆまぬ寛大さでもって、彼を昇進させるというメルセによって、この王国またはスペインの諸王国の何れかの司教区や主要都市にて、陛下はより奉仕されるはずである。陛下が施す前述のいかなるメルセであっても彼に相応しく、任せた事柄について大変優れた報告を行うためである。」

12）同じく、前述の事が世間の評判であるか。学士ブラボ・デ・ベルドゥスコ。――「前述の事は公然たる事実である。」署名。クリストバル・デ・モリーナ。私こと公証人、アントニオ・サンチェス。

おわりに

以上がモリーナのタキ・オンコイに関する史料翻訳の抜粋である。『インカの神話と儀礼』については、一部邦訳もあり、それぞれを参照したが、『功績報告書』についての翻訳は未邦訳だったので、研究者には役に立つだろう。二つの書物の性質として、前者はモリーナが著者でかなり自由に書いているが、後者はあらかじめアルボルノスが用意した質問表に対する定型化された答えが用意されているものなので、それほどモリーナの表現の独自性は出てこない。しかしながら、1584年の質問6に見られるように、タキ・オンコイの指導者であるインディオのファン・チョクネについて詳細に記録していることから、アルボルノスがタキ・オンコイについて記録する1570年よりも早く、ルイス・デ・オルベラ神父とともにモリーナがタキ・オンコイ発見の初期から関わり、内容を熟知していたことが、両史料を読み比べてみることで、より深く理解できるだろう。

アルボルノスの『功績報告書』は、タキ・オンコイに関する内容は、1570年、1577年、1584年と3回あり、数多くの証人が出廷して証言している。これはアルボルノスが教会内で出世していくための功績報告書であるという性格

から、彼の手柄としてタキ・オンコイ発見があったとしているが、モリーナはその点を明確にしていない。なぜなら、オルベラ神父の発見が先で、オルベラがその上司であるモリーナに報告して記録したのが前者の史料であるからだ。しかしながら、アルボルノスの功績も無視できないことから、アルボルノスの要望により、モリーナは証言したのであろう。モリーナの記述はそれゆえ、ほとんどの証人と異なり、アルボルノス側の通訳であるファン・ヘロニモ神父や書記官ベロカル、コロ神父などと同じように、直接タキ・オンコイに関わった巡察使としての詳細な「眼」があり、そのリアリティが非常に興味深い。

ところで、以上の史料のうち、1577年の質問5、1584年の質問3、および質問10について、説明を加える必要があろう。アルボルノスはクスコ司教座聖堂司教のラルタウンに可愛がられ、聖堂参事会員になり、同教会内に敵の多かった彼の代わりに不在の際には司教総代理についている。また、アルボルノス自身も管区会議でライバルの聖堂参事会員などに訴えられたりしたが、窮地を逃れている。訴えられた内容については、タキ・オンコイで不当にインディオから得た物品や財を私のものにした、というものであるが、1570 年の『功績報告書』の段階から彼が何度も主張しているように、巡察使としては無報酬で働き、自腹を切って通訳を雇ったりしていることから、窮地を逃れている。タキ・オンコイ発見についても、アルボルノスとモリーナ、どちらかも「功績者」といえるかもしれないが、当時の教会人の立身出世の生存競争が非常に厳しいものだったと容易に推測できるのが、本史料としても大変興味深い。

注

1）“Relación de las fábulas y ritos de los Incas, hecha por Cristóbal de Molina, cura de la parroquia de Nuestra Señora de Los Remedios del Hospital de los naturales de la ciudad del Cuzco, dirigida al Reverendísimo Señor Obispo del Artaum, del consejo de su magestad.” 報告書の正式なタイトルには、ラルタウン司教から執筆を任されたこと、モリーナがヌエストラ・セニョーラ・デ・ロス・レメディオス教会教区司祭であることが銘打たれている。Cristóbal de Molina y Cristóbal de Albornoz, Henrique Urbano y Pierre Duviols (eds.), *Fábulas y mitos de los Incas*, Crónicas de América 48, Historia 16, 1989, p. 47.

2）Cristóbal de Molina, Brian S Bauer (Tras.), *Account of the Fables and Rites of the Incas*,

University of Texas Press, 2011, p. 91.

3）Pedro M. Guibovich Pérez, “Nota preliminar al personaje histórico y los documentos”, en Luis Millones(comp.), *El retorno de las huacas : estudios y documentos sobre el Taki Onqoy, siglo XVI*, Instituto de Estudios Peruanos Sociedad Peruana de Psicoanálisis, 1990, pp. 35–36. 溝田のぞみ、「史料紹介：タキ・オンコイ運動をめぐって――C. アルボルノスの『功績報告書』を中心に」、『ラテンアメリカ・カリブ研究』 4号、つくばラテンアメリカ・カリブ研究会、1997年、69–74頁。

4）Cristóbal de Albornoz, Luis Millones (comp.), *Taki onqoy : de la enfermedad del canto a la epidemia : Fuentes para el Estudio de la Colonia IV*, Centro de Investigaciones Barros Arana, DIBAM, 2007.

5）本論史料部分は岡崎雅子が校閲した。

6）翻訳に際しては、英語訳 (*Account of the Fables and Rites of the Incas*, Texas, 2011) とスペイン語訳 (Fábulas y mitos de los Incas, Madrid, 1989) を参照した。

7）yronía. ペルーの歴史学者バロンによれば、yronía の最初の定義とは「タキ・オンゴを歌うこと」であり、yerro は「神の掟に抗う罪、過ち」を意味し、儀式の中核とはこの「歌」であった。Rafael Varón Gabai, “El Taki Onqoy : las raíces andinas de un fenómeno colonial”, *El retorno de las huacas…*, p. 343.

8）フランスの歴史人類学者ナタン・ワシュテルは、「モリーナは、ビルカバンバの呪術師たちが、タキ・オンコイというこの『異端』を生んだのではないかと疑っていた」と論じている。N・ワシュテル著、小池佑二訳、『敗者の想像力　インディオのみた新世界征服』、岩波書店、1984年、286頁。

9）一部テキストの欠落がある。以降、三点リーダ（…）にて示す。

10）ワシュテルは、タキ・オンコイの布教にともなって広まった風聞としてこのエピソードを取り上げている。現代のペルーでも事件化し報道されることがある「人間から脂肪をとるもの、首斬り魔、よそ者」であるピシュタコについては、拙著を参照。ワシュテル、前掲書、290頁。谷口智子、『新世界の悪魔』、大学教育出版、2007年。

11）同箇所の邦訳資料を以下に掲げる。網野徹哉、「植民地体制とインディオ社会――アンデス植民地社会の一断面」、『近代世界への道――変容と摩擦』（講座世界史 2）、歴史学研究会編、東京大学出版会、1995年、144–145頁。小池〔ワシュテル〕、前掲書、287–288頁。斎藤晃、『魂の征服　アンデスにおける改宗の政治学』、平凡社、1993年、191–199頁。谷口智子、「タキ・オンコイ、憑依、民族芸能」、『愛知県立大学外国語学部紀要』、第41号、2009年、3頁。加えて、『インカの神話と儀礼』スペイン語版編者エンリケ・ウルバノは、1577年功績報告書における質問 3 への、オルベラ神父の証言内容との重複に注目し、比較検討を試みている。Henrique Urbano,

"Introducción", *Fábulas y mitos*..., pp. 38–39. この邦訳資料として次を参照。溝田のぞみ、「先住民の抵抗：蘇るワカ」、染田秀藤・篠原愛人監修、『ラテンアメリカの歴史』、世界思想社、2005年、224–225頁。

12）小池〔ワシュテル〕、前掲書、288頁。斎藤、前掲書、194頁。

13）*chacara*. 農地を指す。斎藤、前掲書、194頁。

14）小池〔ワシュテル〕、前掲書、290頁。

15）enbixavan. *Account of the Fables*... では、モリーナが用いたこの単語に着目し、ベニノキ (Bija, *Bixa orellana*) の種子から抽出される赤色の染料アナトー（現在でも食肉加工品などに広く用いられる）であるとする。一方で、バロンはケチュア語でリンピ (*llimpi*) と呼ばれる、水銀の主な原料である辰砂を、タキ・オンコイの儀式で用いたとする。リンピについては年代記作者ガルシラソ・デ・ラ・ベーガが『インカ皇統記』のなかで記している。*Account of the Fables*..., p. 120. Varón, *op.cit*., p. 394. インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベーガ著、牛島信明訳、『インカ皇統記』、岩波書店、2006年、4巻、163–165頁。

16）*llipta*. コカの葉を噛む際に用いる灰などの練り物。

17）Lusate. ルシタニア (Lusitania) の派生語で、ポルトガルを意味するか。

18）Ocari. 現在のアレキパ県カラベリ郡の町。

19）書き損じで1565年であろう。カストロ学士（総督ロペ・ガルシア・デ・カストロ）の着任期間が1564年から1569年である事からも、1575年は誤りである。

20）ワシュテルは、1565年、カストロ総督がクスコ市参事会に送った書簡の「《インディオが、先端に青銅のついた槍を3000本以上こっそり作ったこと、また火縄銃と馬を集めていること》を発見し、《恐怖に襲われた》」という記述や、同時期の別の書簡の一部に注目する。「彼は、インディオの使者（フアン・チャンカビルカというクラカの息子）が《教え》を説きながら全土を巡っていると書いてある。《教え》とはなんであろうか。この手紙のあとの方で、ハウハやパリナコチャ地方において《パチャカマックが蘇った》という噂が飛び、《人々（インディオ）は悪魔パチャカマックに多くの生贄を捧げたくさんの家畜をそなえた》と述べている。このインディオの主神パチャカマックの復活は、やはりこの時期にペルーに広がっていた、タキ・オンゴという千年王国運動に関する描写を思いおこさせる。」また書簡では「使者たちがパリナコチャ地方から活動を始めたと明記している。」"蘇った悪魔パチャカマック"とは、モリーナが記録した2つのワカの一つであり、書簡上"インディオの使者"と表されたのは、ワカの説教師であろう。ワカの説教師が各地へ赴く一方、噂や風聞の類でも、ワカの復活がインディオ社会に浸透していったことがわかる。ワシュテル、前掲書、281–283、286頁。

21）*El retorno de las huacas*…, pp. 168−170, 180−182 [ff.2r/v, 5v-6v].

22）ペルーの歴史民族学者トレ・イ・ロペスは、タキ・オンコイ運動の説教師フアン・チョクネが「囲いに入れられ空中をさまよう」神を模した人型を持ち運んだとする。Arturo Enrique de la Torre y López, *Movimientos milenaristas y cultos de crisis en el Perú*, Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial, 2004, p. 94.

23）副王トレドが1570年から1575年にかけ総巡察を実施した主な目的とは、王室歳入の増加を目的とした人口調査に基づいた租税の見直しであった。小山朋子、「スペインの植民政策におけるクラカの位置づけ――フランシスコ・デ・トレドの租税査定の分析」、『ラテンアメリカ・カリブ研究』、12号、2005年、16、22頁。

24）地名の訳出に関し次を参照した。真鍋周三、「16世紀ペルーにおけるタキ・オンコイの政治・社会的背景をめぐる試論」、『ラテンアメリカ・カリブ研究』22号、2015年、40頁。

25）高瀬弘一郎、『モンスーン文書と日本　十七世紀ポルトガル公文書集』、八木書店、2006年、460頁。

26）高瀬弘一郎、『キリシタン時代の文化と諸相』、八木書店、2001年、532頁。

27）高瀬弘一郎、『大航海時代の日本――ポルトガル公文書に見る』、八木書店、2011年、132頁他。

28）*El retorno de las huacas*…, pp. 204−206, 223−228 [ff.1v-3v, 18r-21v].

29）Pedro Guibovich Pérez, “Cristóbal de Albornoz y el Taki Onqoy.” *Histórica*, Vol. XV, No. 2, 1991, pp. 218−219.

30）前年にラルタウンが、功績報告書が作成された1584年にトレドが没した。

31）1577年の質問 4 にも対応した証言内容といえる。

32）1571年建設当時、プエブロ・リコ・デ・オロペサ (Pueblo Rico de Oropesa) と名付けられた理由は、副王トレドがオロペサ侯の子息で、別称であったためとされる（18世紀に入りワンカベリカに改称）。また、同市建設の際の証人として、司教総代理クリストバル・デ・アルボルノスの名が記録された。Rafael Sumozas García-Pardo, *Arquitectura industrial en Almadén*, Sevilla Secretariado de Publicaciones, 2007, p. 212.

33）el un yndio don Joan Chocne. el don Joan Chocna とも表記。

34）フアン・チョクネが携帯したもの（あるいは人）について推察するほかないが、1577年の質問 3 の証言にあるような対象物かもしれない。注22)を参照。

35）真鍋、前掲論文、40頁。

36）ペルーの歴史学者ペレスによれば、1569年から1571年に実施されたワマンガ地方での偶像崇拝撲滅運動についての報告書、1583年第 3 回リマ教会会議で下された自身に有利な判決文の 2 点が付属した。後者に関しては質問10でも触れている。

Guibovich Pérez, *op.cit.*, p. 38.

37）質問 8 について次を参照。溝田、前掲論文、73頁。

38）ペレスは、「1570年、1584年の 2 回、アルボルノスは《発見し調査し根絶した最初の人物》としての自身を強調し、証人の多くは肯定的に供述した」と指摘した上で、他の第一発見者の存在が推測される点、モリーナのアルボルノスに対する評価について更なる考察を加えている。Guibovich Pérez, *op.cit.*, p. 221.

39）*Ibid*., p. 222.

40）ウルバノは、モリーナの証言からも、第 3 回リマ教会会議開催に伴う留守を任せるほどの信頼をラルタウンがアルボルノスに対して寄せていたとする。Urbano, *op.cit.*, p. 18.

41）ウルバノは次のように論じる。モリーナはケチュア語の識者であったために教会会議に招集され、翻訳作業に携わったものの、病に倒れ任務を取りやめ、クスコへ戻らざるをえなかった。その道中、おそらく1583年初頭に、被告人としてリマへ向かうアルボルノスと遭遇した。翌年 3 月、功績報告書の証人となった頃のモリーナは教区司祭という役職にあり、日曜毎の先住民言語での説教を150ペソの俸給で執り行っていた。年代記作者ワマン・ポマは『新しい記録と良き統治』のなかで、モリーナについてこう書き残している。「モリーナ神父の説教。旧来のケチュア、アイマラ語の偉大な通訳。この生粋の通訳によるクスコ市における説教。」生年や出生地を含め、その半生は不明な点も多い。しかしながら、先住民言語及び文化に精通した人物という評価は揺らぐことがない。その能力により、トレドによる総巡察に携わり、巡察使として各地を訪れるなかでインカの儀式や祭礼について知識を深め、更にはラルタウンの目に留まり『インカの神話と儀礼』の執筆を任された。アルボルノスとの邂逅の 2 年後、モリーナは56歳で没した。*Ibid*., pp. 11–13, 17–21.